貧しさから農民を救いたい
一組合長として初心を貫く

角田市農業協同組合第四代組合長
仙南農産加工農業協同組合連合会第二代会長

武田　六郎

【たけだ　ろくろう】

1915（大正４）年	１月１日、藤尾村（現角田市）に生まれる
1955（昭和30）年	藤尾農業協同組合理事
1957（昭和32）年	藤尾農協組合長
1963（昭和38）年	角田市農業協同組合常務理事
1964（昭和39）年	角田市農協専務理事
1970（昭和45）年	角田市農協第四代組合長
1972（昭和47）年	仙南農産加工農業協同組合連合会副会長
1982（昭和57）年	仙南農産加工連第二代会長
1986（昭和61）年	11月18日死去

二度と水呑み百姓になりたくない

いつ買い求めたか、その煤けた文庫本は書架の一隅にあって過去を照らしていた。なぜ貧困が生じるのか、貧富の差はどう解決すべきかを説いた『貧乏物語』（河上肇）は、武田六郎が生まれたころに新聞連載の上、出版された大正のベストセラーだ。戦後に文庫化され何度も版を重ねる。武田の書棚にあったのもその一冊だろう。

「二度と水呑み百姓になりたくない」

悲痛なまでのその思いが武田の原点だった。「百姓をこれ以上貧乏にしてはならない」と言い続け、農協運動に人生を捧げた。

裕福だった武田家が傾いたのは大正の終わりごろだ。雑貨屋を営みながら農家相手に肥料も商っていた父親は、農村不況のあおりを受けて苦境に立つ。二男良男は早稲田大学に進んだが、末子六郎は授業料を納めることができず角田中学校（現角田高校）を途中退学する。しばらく家で農作業に従事するが、一八歳のとき母屋が火事で全焼し、家は没落する。

兄良男は、無産政党の活動家として知られる宮崎龍介・柳原白蓮夫妻と知り合い、農民運動に身を投じていた。帰郷して藤尾農民組合をつくり、毎夜人を家に集めては「多数の力が団結しなければ」と訴えた。

姉のたきは、「六郎に農民運動への志が起きたとすれば良男兄からの影響もあった」

と語っている。

武田には兄の心情を受け止める素地があった。

「私が社会に目を向け始めた一五、六歳のころは農村が極度に困憊したときで農業恐慌に入ろうとする矢先でした。昭和九年には冷害、凶作に追い込まれ、この辺の地区からも娘さんたちや学校の児童ぐらいの者までが、桐生、足利あたりに機織り方向に年季奉公で皆持っていかれました。そういう東北のみじめな姿というものを肌に感じていました」（『武田六郎追悼集　二度と水呑み百姓になりたくない』）

生家没落の引き鉄となった農村不況、身近に見聞きした農民の苦しみ、みじめさ。そうした現実が若い武田の胸に奔流のように流れ込み、農民のために生きることを決意させたのではないか。

一九四八（昭和二三）年、武田は藤尾農業協同組合の発起人代表となって設立に関わり、戦後の民主的な農協運動へ向けて第一歩を踏み出す。

農協は絶対赤字を出してはいけない

意気揚々と船出した藤尾農協だが、七年目に早くも暗礁に乗り上げる。戦時下体制の「農業会」から引き継いだ不良資産や不良購買品の割当仕入れなどで、約九〇〇万円もの累積赤字が判明したのだ。粉飾決算だった。

会計担当から相談を受けた武田は、不安が的中したことを知る。役員が資金繰りに奔走する姿を見て、「赤字になってなければ良いが」と心配していたからだ。

昭和三〇年の通常総会は騒然となった。毎年二〇万円の利益を出しても再建には四〇年かかると言われ、藤尾農協は解散寸前まで追い詰められる。

「お前らが借金したんだろう」と責める組合員たちを前に、武田は火中の栗を拾う決意をする。総辞職した役員たちに代わって理事に就任。宮城県中央会の応援を得て「再建整備五ヵ年計画」を掲げ、農協再建の道を歩み始める。さらに昭和三二年には藤尾農協の組合長に就き、ひたすら再建に打ち込む。

武田は当時の頑張りを「血みどろの闘い」と形容する。

職員の給与は据え置き、貯金の支払いは停止。宮城県信用農協連合会に相談しても、当時は県信連自体が資金繰りに追われており、武田は「自力で立ち上がるほかはない」と覚悟を決める。農協を再建できなければ組合員に貯金は戻せない。武田は組合員に懸命に協力を呼びかけた。職員たちは暖房もない事務所で薄給に耐えながら、組合長の武田を援けた。

当時農協職員だった浅山みのは、米俵をかつぐ武田の姿を覚えている。「米の供出時は、職員と一緒になって夜遅くまで米俵を担いで手伝ってくれた。六〇キロ入りの米俵を担いで歩み板を昇り、倉庫の天井まで積み上げる。そんな組合長さん、ほかにいるでしょうか」。

藤尾農協の再建整備は順調に進み、五年を待たずに赤字を解消した。

この体験は武田に重い教訓を残す。赤字になれば信用は地に落ち、農協にお金を預ける人はいなくなる。赤字から信用を回復するのは一生かかっても難しい。

武田は「農協は絶対赤字を出してはいけない」と誓い、ことあるごとに口にした。いわく、役員は資本に責任を持て、内部留保のできる経営をせよ、組合員から預かっている出資金には絶対責任を持って一定の利益を確保しなければならない、自己資本の充実、つまり経営の健全化こそが組合員への最大のサービスだ。

その考えは、のちに角田市農業協同組合（現ＪＡみやぎ仙南）の組合長となっても、また〝経営主義〟の批判を受けても揺らぐことはなかった。

宮城県内随一のマンモス農協発足

昭和三八年春、河北新報に「マンモス農協発足」の記事が載った。

四月二七日、角田市内の七農協（枝野・角田・北郷・桜・西根・東根・藤尾）が合併し、組合員四五八三名を擁する宮城県内随一の大規模農協が誕生したのだ。

武田は、藤尾農協再建の目途がついたころから近隣農協との合併を考えるようになっていた。昭和三〇年代、機械化と専業農家の減少で農協は変化を求められていた。さらに、一九六一（昭和三六）年の農業基本法公布が武田の考えを後押しした。

零細な規模の農協では、多様化・高度化する組合員の要望に応えることができない。「農民が安心して任せられる農協にするには合併すべきではないか」。武田は近隣の農協へそう提唱した。ちょうど角田市が第一次農業構造改善事業の地域指定を受け、受け皿を検討していた時期でもあった。

武田は、当時角田市の助役を務めていた三文字正次から相談を受ける。三文字は角田中学校時代の同級生であり、角田町農協で参事を務めたこともある優秀な能吏だった。三文字は、構造改善事業を進めるには農協の合併が必要と言う。もとより武田に異論はない。

「これを機に、農協がさらに力をつけて角田市の農業の近代化を図ろう」

思いは一致した。他の農協組合長の多くも賛同した。一部の農協から上がった合併反対の声も三文字が丁寧に説得して回り合意を得た。

「宮城に角田農協あり」と言われるほど規模も経営内容も優れた農協は、こうして発展の扉を開いたのである。

合併のメリットを活かした事業を展開

組織の拡大はスケールメリットをもたらす。角田農協は、生産・流通の共同利用施設やコミュニティ施設の建設など次々と合併のメリットを活かした事業を展開した。

先頭にはいつも武田の姿があった。

ライスセンターの建設は、生産・流通の合理化を促す施設として構造改善事業の目玉のひとつだった。しかし建設予定地の地主がなかなか首を縦にふらず、敷地の獲得交渉は難航した。聞けば田畑をつぶしてまで売りたくないと言う。ならばやむを得ないと、武田は自分の水田を代替地として提供することで地主の了承を取り付けた。

大型機械も共同利用になる。トラクター一四台導入の知らせを受けた農協青年部から、武田に訴えがあった。「ぜひ自分たちに免許を取らせてほしい」。武田の許可を得た青年部部員たちは阿武隈川河川敷で運転の練習を行ない、無事免許を取得した。

昭和五三年から始まった第一期水田利用再編対策では、武田と当時角田市長になっていた三文字のコンビがふたたび息のあったところを見せる。

武田は「減反問題は避けて通れないだろう」と三文字から聞かされていた。水田利用再編対策は、転作を奨励する政策へシフトしている。

「転作をやろう。まず一〇〇ヘクタールに麦を播こう」

武田は集落座談会の場へ何度も足を運んで取り組みの内容を伝え、組合員の理解を得て「集団転作組合」を組織した。昭和五二年の秋、一足早く一〇〇ヘクタールの水田に麦を播き、翌夏に麦秋を実現させたのである。

県の構想を先取りするかたちで集団転作組合をつくり、転作を成功に導いたこの方法は、「角田方式」として一躍評判になっている。

〝組織の協同活動〟を、〝農協間の協同活動〟へ

バイクが武田の通勤手段だった。公用車を薦められても「百姓だと思うと何でもない」とバイク通勤を続けた。役員であるにも関わらず、自ら職員より安い報酬で働いていた時期もある。質素で堅実で「公」を優先した。

吉田松陰に「私を役(えき)して公に殉(したが)う者を大人(たいじん)と為(な)し～」の格言があるが、武田はまさに、私を役して公に殉う、つまり徹底して自分を公のために役立てた人物だった。

武田は「農協の主人公は組合員だ」と言い、農協運動を組織運動と位置づけて経営にあたった。

「組合という組織は、組合員が良くなって組合員が結集しなければ成り立たない」

裏表なく、誰にでも分け隔てなく接する武田の言葉は、自然と人の心に染み入り、職員や組合員を動かした。その機動力が角田農協の強さでもあった。

協同活動の中心は、稲作の集落組織である興農組合だ。そこに畜産・野菜などの作物部会、婦人部や青年部がつながり、まさに「組合員を主人公」に大きな農協運動の渦を形成していた。米の収量を上げるため青年部で共励会をつくると農協では米作課を設けて活動を支援。〝米づくりは角田に学べ〟と言われるほどの高収量を記録した。

武田は、こうした〝組織の協同活動〟を、〝農協間の協同活動〟に広げようと考える。

仙南地区ではすでに、武田や白石農協の三澤賢吾、宮城県農協中央会の阿部長寿な

どが中心となり、二市七町（角田市・白石市・七ヶ宿町・柴田町・大河原町・村田町・川崎町・蔵王町・丸森町）でつくる「仙南地区広域営農団地」が事業の方向を模索し始めていた。

昭和四七年には、営農団地の構想をもとに仙南農産加工農業協同組合連合会（現株式会社加工連）が発足。同時に、これからの農業振興は消費者と結びつくことが重要と判断し、日本生活協同組合連合会に加入した。

角田農協は昭和四五年から宮城県民生協・宮城県学校生協（現みやぎ生協）とのあいだで肉と鶏卵の取引を始めていて、生協組合員と農家の交流を通じた〝産消提携〟を進めていた。仙南農産加工連の誕生で、その活動がよりスムーズになった。

「自分たちがつくったものに付加価値を付け、自分たちで販売していく」ことを目指していた武田は、生産者と消費者の連携による新しい協同活動に大きな期待を寄せたに違いない。

産消提携はのちに仙南農産加工連の常務理事となった窪田立士をはじめ、多くの生産者や職員、生協組合員の努力でより大きな運動へと発展する。

昭和六一年、阿武隈急行開業で湧く角田のまちに恒例の農協祭の季節が訪れた。一一月一五日・一六日は風が冷たく寒い日だったが、武田は祭の会場に足を運んだ。毎年の農協祭は武田にとって「市ぐるみの協同活動」だった。親しい顔、懐かしい顔と笑みを交わし、祭の賑わいに目を細めた。武田が急逝したのはその二日後、一一月一

八日のことだった。

県農協連合会のトップに推されても泰然として動かず、「自分は角田農協の組合長だ。角田農協の組合員を守るのが仕事なんだ」と、生涯、一農協の組合長を貫いた。里山の森に根を張って夏は木陰をつくり冬は薪を与える、そんな大樹のような人生だった。